



マ  
マ  
は

アイドル  
アンドロイド  
偶  
像  
機  
械  
人  
形

め  
ぎ

ママは偶像機械人形

めぎ

『みんなー、ありがとう！ ちょっと名残惜しいけど本日のステージ、最後のナンバー。「Sparkling Love Affair」！ いっくよー！』

胸元を開けた派手な衣装に身を包んだいかにもアイドルという風貌の女性がライブステージの上で声を上げる。

背丈は170cm 程度、外見年齢は十代後半か二十歳前というところだろうか。

彼女は染めたような長い金髪を揺らし、ステージ上を小さく駆ける。

僅かな助走の後、膝を少しかがめるとステージを蹴り上げ大きく、3 m以上の高さに飛び上がる。

明らかに人間の範疇を超えた跳躍力。

だが、観客は歓声をあげるも驚いた様子はない。

『カーエーデー!! フウウーっ!』

空中でくると身を翻し、谷間から除く大きな胸を揺らしながら彼女がステージに着地すると、周囲からは割れんばかりの歓声が上がった。

ここは郊外の中規模ライブハウス。

休日の夜、数人のアイドル合同ライブが行われていた。

だが、その出演者は全員人間ではなかった。

彼女たちは全員が人格付与型アンドロイド、自我を持つ機械人形である。

世界的な人口減少の対策として人格付与型アンドロイドに一定の権利が認められてから20年ほど。

優れた容姿と人間を遥かに超える運動能力を備えたアンドロイドアイドルは今や一般的な存在になっている。

今、ステージの上に立っているのはデビューから十年以上経ったベテランアイドルの立花カエデ。

デビュー当時からの根強いファン、入れ替わりながらも応援を続ける新規のファン。

彼らに支えられ、カエデはアイドルとしては中堅どころというポジションを維持している。

『みんなー、ありがとー！ だいすきだよー!』

曲が終わり、カエデがポーズをとると歓声と拍手が浴びせられる。

「いやー、やっぱりカエデ最高だよな」

「色褪せない、っていうかモーションも経験値のせいかなますますキレイがよくなってるよね」

「次はいつ会えるのかな……」

「カエデちゃん、結婚してくれーっ!」



歓声を上げるファンに手を振りながら最後に大きく跳ねてステージ裏へと移動する。

ファンの視線が途切れ、一息つくとかエデはよろめきながら壁にもたれかかり大きく息を吐き出す。

その吐息は辺りの気温を上げるほどの熱がこもっていた。

人間と同様の姿、それもプロポーションを最優先されるアイドルタイプの筐体は元々排熱に問題が起きやすくはあったが、かエデの発する熱は周囲にいる他のアンドロイドたち以上の物であった。

「ふう……ちょっと、頑張りすぎたかなあ」

少し眉をさげ、困ったような笑いを浮かべるとかエデは僅かにふらつきながら裏口へと歩きはじめた。

ライブハウスの裏手、一般客立入禁止の駐車場スペース。

大手の芸能事務所のロゴが記されたトレーラーやマイクロバスが止まっている横をすり抜け、かエデは奥にあるバンへと歩いていく。

「立花芸能事務所」 そう書かれたバンの扉を開くとかエデは車内へとその身を滑り込ませた。

バンの中に溜め込まれた冷気がかエデの体を包み込む。

小さなスペースに詰め込まれたアンドロイドの整備用機器の隙間からひょこ、と顔が突き出される。

「大丈夫？ 母さん」

年齢はかエデの外見年齢より明らかに年下と思える少年が少し心配そうな表情を浮かべてかエデを迎え入れる。

「うん。特にトラブルはないけど……熱はちょっといつもより溜まっちゃってるわね。排熱作業、お願いね。司くん」

笑みを浮かべて答えたかエデは後部座席を改造した整備台に腰掛けると、惜しげもなく衣装を脱ぎ捨て裸体を司と呼ばれた少年に晒していく。

少年もその行為に顔を赤らめ、上気したようには見えるが驚きや抗議は示さず整備機器の操作を始める。

機器のひとつから伸びるケーブル。

その先端をかエデのうなじに設けられたコネクタへと差し込めば、びく、とその体が震えて一瞬虚ろな表情となる。

「ぴ、きゅ。メンテナンスモードが使用可能です。警告：機体温度が高温となっています。……ん。いいわよ。司くん、お願い」

かエデは表情に柔らかさが戻ると同時に何かを待つように目を閉じる。



その言葉に司は小さく頷けば、機器のキーボードを叩きコマンドを打ち込めば。

ケーブルからの信号がカエデの制御回路に流れ込み、再び表情が消えて。「ぴ。全排熱用ハッチ開放コマンドを受信。排熱処理を開始……ん、あ……んあああっ！」

カエデが小さく叫ぶと同時に彼女の内部機器がその意志に関わらず動作するのを感じていく。

うい、ぷしゅ、という機械音と共に両乳房、肩口、背中、脇腹、腹部、太腿。

身体中のハッチが開いていき、金属フレームの中に収められた電子回路やアクチュエーターをさらけ出す。

機械そのものの裸体を顕にした次の瞬間、すべての開放部から勢いよく熱気が吹き出して一気に車内の温度が上昇する。

「わっ！ 確かにいつもより熱、すごいね……。母さん、すこしブロワーかけるよ」

司は傍らにあるエアブロワーを手にとると、空気を吸い込み、強烈な風をカエデへと吹きつける。

その風がカエデの機器の隙間を吹き抜ければ、内部に溜まった熱気を外へと排出していく。

同時にその刺激はノイズとなってカエデの回路を駆け巡る。

「ん……ふ、あっ♡ そ、そこ。冷えて……きもちいい……♡」

「も、もう！ 変な声ださないでよ！ 母さん！」

「あ、ごめんね。わざとじゃない……ぴきゅんっ♡ ん、は、あっ♡」

司は顔を赤くしながらブロワーの風をカエデの体に当てていく。

その行為に反応し、時折声が漏れ出るがその表情は恍惚としたものだ。

数十秒後、カエデの全身から熱気が抜けきったことを見届けると司はやや疲れた表情で近くの椅子へと腰掛けた。

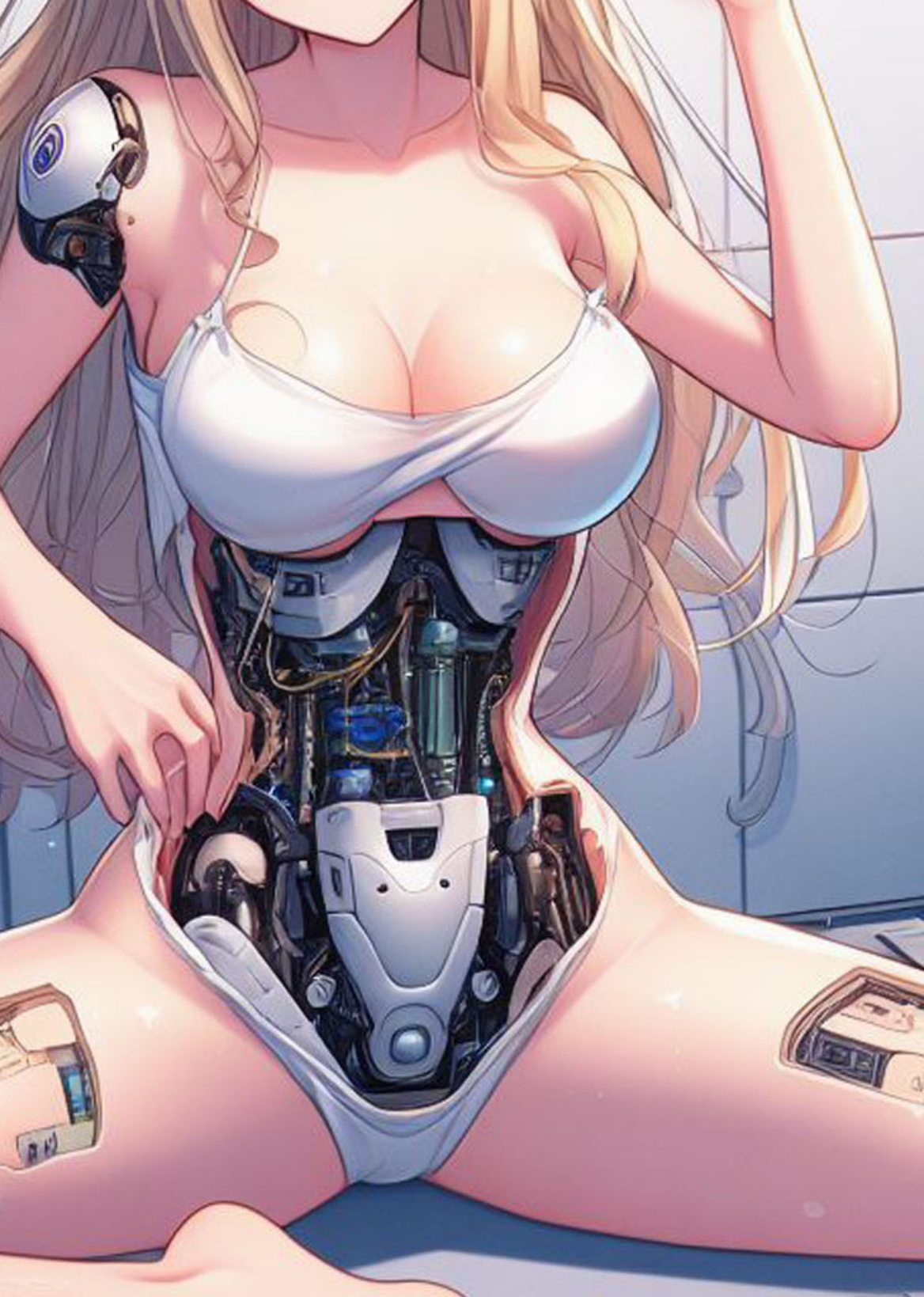
「ぴ。気体温度が正常値に復帰しました。……ありがとう、司くん」

「うん。楽屋で排気させてもらえればもうちょっと楽なんだけどなあ」

「仕方ないよ。これが私達の仕様なんだから」

通常のアンドロイドは身体に設けられたスイッチ操作などでもメンテナンスハッチの開放は可能だが、カエデ達アイドル型の場合は客の前でハッチを開放するような事故を防ぐため、専用機器の信号が必要な設定となっていた。

全身のハッチを閉めてから、一糸まとわぬ姿のまいうちわでぱたぱたと



自分を煽ぐカエデ。

そんな彼女を思わず司はまじまじと見てしまう。

立花カエデ。彼女は司の育ての母親である。

元々のカエデは中堅事務所の発注で制作されたアイドルアンドロイドだったのだが、カエデの担当だった司の父、浩史と恋に落ちた。

浩史は借金を背負ってカエデを買い取り、カエデと共に生活するために芸能界の人脈を使って事務所を立ち上げた。

それが司が七歳のとき。

司は浩史とカエデが出会う前に生まれた子供だったが母親は彼の出産時に死亡している。

カエデと出会った日、満面の笑みと共に発せられた「今日から私が司くんのお母さんになります！」という言葉で司は未だにはっきりと覚えている。

最初はアンドロイドでアイドルの女性が自分の母親になる、ということを受け入れられない時期もあったが、ほどなく三人は「家族」としての関係を築いていった。

アイドルとしての活動のため両親が不在気味であることを除けば幸せな環境ではあったと思う。

だが、それが一変したのは半年前。

父の浩史が交通事故で死亡したのだ。

法律上、浩史の所有物であるカエデは司に相続された。

メーカーでマスター登録の書き換えも行われ、名実ともにカエデは司のものとなる。

そして今。

父の跡をついで司は立花芸能事務所の所長となっていた。

まだ学生の身分、学業との両立は厳しい状態ではあるが現実問題としてカエデの収入が家計の頼みでもある以上、仕方のないことではあった。

「……どうしたの？ 司くん？」

物思いにふけていた司が気がつけば、カエデの顔が眼前に迫っていた。

当然ではあるが、アイドルとして製造されたカエデの顔は美形という他ない。

無論、アンドロイドアイドルは美女揃いではあるが、愛らしさと美しさが絶妙のバランスで融和したカエデは一際魅力的である、と思うのは家族の最良目だろうか。慌てて司は目をそらそうと視線を落とすも、カエデの肢体が目に入ってしまう。

豊かな乳房の上に造形されたちょうどよい大きさの桜色の突起。僅かに



浮かび上がるメンテハッチの分割線を除けば人間と見分けのつかない美しさだ。

その肌はどんな高級な陶器よりもきめ細かく、冷却の済んだ身体はひんやりとした温度が心地いい。

だが、彼女の股間のみは周囲の人造皮膚から浮いた少し無骨な金属カバーで覆われている。

その中にあるのはアンドロイドとしての拡張スロット。

現在は運動機能を拡充するための補助演算装置と、小容量ではあるが追加バッテリーが一体化したユニットが挿入されている。

だが、前張りのようにも見えるそれは少年の視線を欲情を刺激する妨げにはなっていない。

「あ、ひょっとしてママの身体でドキドキしてる？ あはは」

「……母さん！ 早く服着て！ 車出すから、家につく前にちゃんと着替えといてよ！ あ、あと、そのママってのはやめよう！ 母さん、で！」

赤くなった顔を隠すようにうつむかせ、カエデの姿が外から見えないよう注意しながら扉を開け、運転席へと乗り込んでいく。

自動運転のバンの運転席に免許を持っていない司が座る意味はないが、今は母親から視線を外していたかった。

軽い抗議の声を上げるカエデを無視し、運転席のコンソールに灯が灯れば行き先を自宅に設定する。

カエデの声とは比べるべくもない、アナウンスのような自動音声の流れるとバンは綺麗にトレーラーの間をすり抜け、二人の自宅への道を走り始めた。

数日後の夕暮れ時。

昨日の夜もカエデの PV 収録に付きそって帰宅したため、まだ眠気の残る眼をこすりながら司は自宅までの道を歩いていた。

曲がり角をこえ、自宅が見えた途端、彼はため息をつく。

「あれ……またかあ……」

玄関脇にある車庫、その中に収まっているべき社用車、カエデの整備設備を搭載したバンが消えている。

眉をひそめる司の後ろから二度、クラクションが鳴るとバンが脇をすり抜けていく。

自動運転のまま、車庫に滑り込んだバンからバツの悪そうな表情のカエデが降りてくる。

「母さん、社用車を買物に使うなって言ってるでしょ！ 只でさえ目立つんだから！」

一応、事務所のロゴはマグネットカバーを付けて隠してカエデも大きめの眼鏡をかけているものの、どこでファンに見咎めるか分からない出で立ち。

「ごめんね。でもチラシでスーパーのセールがあって……ごめんね♪」

てへ、と笑いながら手を合わせられればそれ以上責める言葉が出てこない。

もう一度ため息を付き、二人揃って玄関の扉を開く。

家の中は玄関も廊下も綺麗に掃除され、床に埃一つない。

十年前この家にやってきた時から、カエデはアイドル家業の合間を縫っての家事をほぼ完璧にこなしていた。

長い金髪を結え、地味なブラウスにメガネを掛けたカエデは鼻歌を歌いながら台所に向かう。

当人とすれば目立たぬようにしているつもりでも、抜群のプロポーションと整った顔の造作は隠せない。

スーパーでの姿を想像すると、また司はため息を付いてしまう。

「どうしたの？ 司くん。あ。昨日のお仕事の疲れかな……。お夕飯まで寝てる？ ごはんできたら起こそうか？」

心配そうに、司より拳二つは高い位置にある顔を寄せてくる。

眼鏡越しの済んだ瞳に見つめられれば、慌てて顔を背けた司は無言で階段を駆け上り自分の部屋へと閉じこもる。

その様子にあらあら、と困った顔を浮かべたままカエデは台所へ向かっていった。

今日の夕飯は豚汁とアジの開き。

カエデには食事機能はないが司が食事を続ける間、嬉しそうに微笑んで食卓についている。

数ヶ月前までは親子三人そろったダイニングは少し手狭に感じたが今は妙に広く感じる。

昨日の仕事でつかれてない？ 学校生活はどんなの？ そんな他愛のない会話を続けるカエデ。

メガネを外して髪も下ろした母親は、服装こそ質素なものであるが間違いなくアイドル、立花カエデの出で立ち。

使い古されて少し伸びたシャツの隙間から除く谷間は、その肌の滑らかさも相まって艶かしくすら見える。

あまりじろじろと見ないようにしながら、司は食事を進めていくが落ち着かない気分を隠せないでいる。

カエデはそんな司の視線に気がつけば、にば、とアイドルそのものの笑顔を向けてくる。

「司くん。お代わりは？」

「あ、うん。もらおうかな」

差し出されたご飯茶碗を受取りながら司は内心の動揺を隠すので精一杯だった。

はっきり、自分の鼓動が高まり、血が滾るのを感じている。

自分の限界が近づいていることを自覚すれば、前からの計画を今日実行することに決める。

笑みを絶やさぬカエデが差し出した飯をかきこむと、司は「ごちそうさま」と小さくつぶやくとダイニングを走るように出ていった。

司は階段を降ると廊下の奥の部屋へと駆け込んでいく。

その中は他の部屋と様相が違い、バンの中と似たような機器が並び中央にはベッドのようなアンドロイド用整備台が据え付けてある。

ここは自宅の地下に増設された、カエデ専用のメンテナンス室だった。

息を切らせながら司はその奥の小さな棚、一番下の段の引き出しに手をかける。

その真中にある鍵穴にポケットを弄り小さな鍵を差し入れて回す。

かちり、と小さな音ともに鍵が外れればもどかしげに司は取っ手を引く。

「はあっ！ はあ……」

息荒く、その小さな棚を開けば。

中に収められているのはシリコンの筒に小さな回路や機器が取り付けられ、片方の口には生々しい女性器が象られた部品。

アンドロイド用の女性器ユニット。

棚の鍵は父の死亡後、遺品整理の時に見つけたもの。

疑いようがなく、父がカエデとの行為に使用していたものだった。

長年使用されていたことを示すかのよう、回路部品の塗装は一部が剥げ落ちている。

深夜、父と母が身体を重ねていたことは理解していた。

思春期を超える頃にはアンドロイドと人間とは言え、愛し合う夫婦なのだからおかしいことではない、という意識はあった。

だが。整備代の傍らに立てかけられた写真、その中で微笑んでいるのは1

0年以上前、デビュー当時のカエデ。

今と寸分たがわぬ容姿ではあるが、少し流行から外れた衣装のその姿を司ははっきりと覚えていた。

まだ彼が物心がつくつかつかないかのころ。

父親が自分の担当アイドルであることも説明せずに見せたライブビデオ。ダンスの中でまるで自分一人に向けられたかのような笑顔のアップ。

その瞳に幼い司は魅入られた。

まだ当人も知らない言葉ではあったが「カエデ推し」になった瞬間だった。

それから二年、タブレットの使い方はカエデのライブを見るために覚え、幾度かは父の同僚に連れられていく形でカエデの生ライブにも歓声を上げていた。

そんなある日、その推しアイドルが突然自分の母親になったのである。

内心、司は心臓が口から飛び出そうほどの衝撃だったが、当時十歳だった少年は自分の感情の処理に戸惑ったまま今に至った。

最初は単純に母として、姉として接していたつもりだったが、なんとかそれを押し殺し、あまり表情に出ないよう、子供としての愛情を受ける日々を過ごしてきた。

しかし、突然の父の死、そしてみつけた女性器ユニット。

「母さん……カエデ……っ！」

淫靡な形の機構が、カエデの拡張スロットに収まる姿が目に見え浮かぶ。

カバーが開き、中に開いた空洞にゆっくり差し込めば、想像の中のカエデが上気した喘ぎをあげて蕩けた瞳で見つめてくる。

呼応するように司の股間に血流が集まり、忍耐の限界を超え始める。

「母さん……僕は……っ！」

シリコンの管を握りしめ、ズボンを下ろしてペニスを露出する。既に硬く天を衝いた肉棒は、勢いよく飛び出し腹を叩く。

「母さん……っ！」

両手で女性器ユニットを握りしめる。

カエデの膣が司のものを柔らかく包み込み、その内壁が優しく刺激してくるような感覚に耐えきれず握りこんだ手を上下させ始める。

『あ……司くん！　きて……カエデの中に……母さんに……あああ♡』

脳裏で喘ぐカエデと、写真の中で微笑むカエデ。その二つが視界の中で重なっていく。

「母さん！！　母さん！！」

今はカエデに接続されているわけでもない冷たいシリコンの塊に過ぎない女性器ユニット。

それでも並のオナホール以上の感触と、間違いなくカエデの意志で機能していた部品という認識。

それらが重なれば、司の脳を焼くような興奮が走りほどなく高まりは頂点に達していく。

だが。

『司くん？ 入っていいかな？』

ノックとともに響く、幻想ではない母の声。

びくんと震えた司の背筋に冷たいものが走り、急速に怒張は萎えて。

「あ、ま、待って……ちょ、ちょっとだけ……！」

シリコンの筒を引き抜けば、先走り汁が糸を引いて伸びていく。

透明な糸を洗い落とす暇もなく、ユニットを元の棚に押し込める。

慌てながらズボンを直し息を整える。

わずかに立ち込める男の匂いは隠しようもないがもはやそれすらも司は気にする余裕を失っていた。

「は、はい！ 母さん！」

扉を開くと、カエデの手にはお盆に載ったカップがひとつ。

「お茶持ってきたんだけど……邪魔しちゃったかな？」

少し困ったように笑うカエデに、司は慌てて両手を振る。

「いや！ う、ううん。いや、ちょうど喉乾いてたから……！」

挙動不審な息子を心配そうな目で見る母親の姿に罪悪感を覚えるが。

カエデは盆を机に置くと部屋の片隅に目を向ける。

「どうしたの、母さん……あっ！」

視線の先が僅かに開いた棚であることに気がつけば、司の背筋が再び凍りつく。

ずい、と司を押しつけてカエデは棚に歩み寄る。

「あ、あの……母さん！ こ、これは……！」

背を向けたままカエデは鍵が外れたままの棚を引き出していけば。

押し黙ったまま、濡れそぼった自らの女性器ユニットを手にとっていく。

もはや言い訳のしようもない、彼女にとって大切であろう部品を勝手に犯してしまった事。

母と息子としての関係、事務所の担当としての関係、それらが崩壊する。

それだけは避けたく、償いの言葉を紡ぎ出そうと回らぬ頭で必死に考え始めた司。



だが。静かに振り向いたカエデの形相は司の想像外のものだった。

怒りに震えるでもなく、凍りついた表情でもなく。

まるで、ウブな少女のようにも見える顔つきで恥ずかしさと笑みが相混じった表情。

十年間共に過ごしていても見たことのないその表情に司が言葉を失っている。

「司くん……ごめんね？ あの……これ、つかったの、かな？」

ずい、と汚れた女性器ユニットを差し出してくるカエデ。

「ち、ちが、いや、ちがわないけど、は、初めて、今日、その、あのっ！」

動転してしどろもどろな言葉を紡ぐ息子の手をカエデはぎゅ、と握ってくる。

「だ、大丈夫。その、別に減るようなものでもないし！ お、お母さんも浩史さんと十年過ごしたのよ？ 男の子が……その、ほっといたらどうなっちゃうくらい……わかってます！」

「か、母さん……」

「それに、ね。……ねえ。司くん。ママのメンテナンスハッチ……左胸の。開いてみて」

カエデは司の手を離すと、ベッドに腰掛けて自らのシャツの前をそっと開けていく。

アンドロイド特有のなめらかな肌の上、僅かに浮かび上がる分割線。

抜けるように白く豊かな乳房が司の眼前で揺れていく。

父の死後、司がカエデのメンテナンスを行うようになってからは何度も見た光景。

だが、いつもと違いカエデの表情は乙女のように紅潮し、目を震わせている。

その姿に司の心臓は痛いほどに高鳴っていく。

「う、う、うん。じゃあ、ロックを……！」

消え入りそうな声で呟いた司は傍らの機器から伸びるケーブル、パンの簡易メンテナンス機器のものと同じ形状のそれをつまむ。

カエデの首筋を撫でるように髪をかき分け、うなじのコネクタへケーブルを接続する。

「ぴ、きゅ。メンテナンスモードが使用可能です。……ん、ロック解除できるよ……あ。待って」

コンソールを操作し、ハッチ開放のコマンドを打とうとした司の手を掴むと、カエデは悪戯っぽく微笑んで。

「手動がいいな……ね、こっちでお願い……」

そう言うとカエデは司の手を取ってそのまま深い谷間に滑り込ませる。

指の腹で探ると、確かに感触の違う部位がそこにあった。

それはまるで人間の肌とシリコンの境目のようなわずかな段差。

「あ、あの、母さんっ!？」

「もう。ママのマニュアル読んでないのかな？ ん……そこっ……押し込んで……」

谷間に隠された硬質部分、そこを押し込めばかちりと沈み込む感触が伝わってくる。

「ぴゅい！ 左胸部メンテナンスハッチ開放……ん、ふ、あっ……くふんっ♡」

コードを打ち込まれて全身のハッチを開放するときには出したことのない、艶めいた声が室内に響く。

同時にぷしゅ、という音とともに左乳房のみが外側に開き、内部機構を露出させる。

その中央、乳首の真下辺りだろうか、小さな LED が鼓動のように明滅している。

今までメンテナンスしたときにはなかった反応。

「か、母さん。なんか……その……た、たしか、この回路は……」

左胸中央部のスロットに組み込まれているのは快楽中枢回路。

カエデの性機能を司る部品。

それが明滅しているということは。

「うん。えっと。わたしは……性欲が高まっています。だってしょうがないでしょ！ 前はいっぱいしてたのに……半年だよ？ 快楽中枢回路は一度組み込んだら外せないんだもの」

「じゃ、じゃあ、その、ずっと半年……？ で、でも、いつもはこんなになっ  
てなかったような……」

「そ、それはね。その、おっぱいとかで……無理やり沈めてたの！ 自慰、してたんですっ！ お仕事の前の日とかに！ 大変、だったんだよ……」

切なげに声をあげ、じっと司を見つめるカエデ。

「……か、母さんは……僕に……どうしろっての……？ だって、その、母さんは父さんの……!」

もはや自分でもはっきりわかっていたが、司はカエデを母親と同時に女性として、さらに推しのアイドルとしても未だに見ている。

その比率はどんどんと女性、の部分が高まってはいたが。

荒ぶる感情をぶつけられたカエデは困ったように目を落とす。

「……今でも私は……お父さん、浩史さんのことは愛してる。でも、司くん……貴方のことも十年間……ずっと、すごして……愛してる、んだとおもう。私の人格モジュールの愛情度数値は……すごく高くなってるけど。それが人間で言う親子愛なのか、恋愛感情なのか……わかんないの。だから」

カエデの手がそっと司の頬を包む。

「司くんが決めて欲しい。私は司くんの所有物、人格付与型アンドロイド。私は貴方のことを愛してるのだけは間違いないから。だから、決めてほしいな。ママとしての私、女の子の私、アイドルの私……どれが、欲しい？」

頬を包んでいた手が降りてきて、司の胸に添えられ、瞳同士が見つめ合っていてカエデは答えを待ち望む。

「……全部」

数秒間の葛藤後、司の声が絞り出される。

「え？」

「全部っ！ い、今更……だって！ 母さんを、カエデを、父さんと結婚する前から好きだったんだっ！ まだ子供だったのにあんな、すごい笑顔で僕だけに見せてるような笑顔で！ ファンだったのに突然父さんと結婚して僕の母さんになって！ それから十年！ ずっと、ずっと好きだったんだからっ！ 今更……どれかだけなんかつ！」

「司くん……」

「でもっ！ みんな欲しいのは本当だからっ……カエデも、母さんも全部！」

司はカエデを抱きしめる。柔らかな胸に顔を埋めて腕を背中に回す。

「ん……あうっ♡ あ、あの？ お、落ち着いて……ね？」

突然の事に戸惑いながら、胸の中にいる愛しい息子をよしよしと撫でる。

「うん。わかった！ 今日から立花カエデは司くんの担当アイドルで、ママで、恋人！ これでいいかなっ！ 恋人、はまだ初めてだからこれから頑張るけど！ あとは今まで通り、ううん、今まで以上に頑張るね！」

「か、母さん……カエデ……その、ど、どっちで呼べばいいかな……？」

「どっちでも、好きなほうで好きな時に！ あ、ママ、も忘れずにね！ あ、あと……」

輝くような笑み、アイドルとして以上のものに見える表情を向けるカエデ。

だが、その体がぐたり、と倒れて整備台の上に横たわる。

同時に胸部回路の点滅が激しくなっていく。

「あ、あの……いまで……あは。性欲値あがっちゃった……。もう、せっ

くすしないと……ママ、こわれちゃい、そう……♡」

整備台の上、股間のハッチを見せつけるようカエデは足を大きく開いている。

金属プレートで構成されたハッチの上部、小さなスイッチを押せばシャッターがぼしゅ、と勢いよく開く。

「じゃあ……母さん、増設回路外すよ」

この状態ではその機能はないとはいえ、女性そのものの部分。

愛しく思っていた相手のそれに触れれば司の鼓動はますます早くなっていく。

震える指先でハッチ内部のスイッチを押し込めばカシュ、とカエデの腰の中で何かが外れる音の後、ウィィ、と小さな唸りとともに部品がせり出していく。

「ぴ、きゅ。前部拡張スロット、デバイスリリース開始……。ん、あは……。恥ずかしがらなくてもいいのよ。これから何度も……してもらうんだから♡」

くす、と小さく笑うカエデ。

すこしだけ、毎夜カエデと父が繰り返していたであろう光景を思い浮かべるが、無理やりそれを思考から追い出す。

せり出した部品を引き出せば、拡張スロットという名称の穴が股間に開いている。

その光景がまるで誘っているようで。

一瞬、スロットに自身をねじ込みたい衝動に駆られる司。

深呼吸して整備代の上から先程まで「使用」していた女性器ユニットを手にとるとゆっくりとスロットの中に先端を押し込んでいく。

先端のコネクタがカエデの奥に達すれば、かちりと小気味よい音がしてはまり込む。

生々しいピンク色の開口部周囲には金属フレームが浮かび上がっているが、正しく女性の体となったカエデ。

「ぴ、きゅっ！ 前部拡張スロットに新規デバイスが接続されました……女性器ユニット FA-1055S を確認……んっ♡ ひさしぶり……ふ、あ……♡

くふうっ♡ ん、んっ……ぴゅ、ぴあっ♡ エラー：性欲値が上昇しています……。ん、あ、やっぱりっ……！ んあ、あ……も、漏れちゃう……潤滑液……でちゃう……や、やあ……♡」

半年ぶりに繋がれた機構は過剰反応し、接続されたパイプから過剰に潤滑液が溢れ始める。

ピンク色のシリコンが小さく震え、内部に溢れそうな潤滑液が割れ目からわずかに漏れ始める。

半年間の間、乳房を使った自慰だけで抑え込まれていた性欲が、女性器ユニットの装着、司への感情で刺激され制御を失って人格モジュールの中で増幅されていく。

「ぴゅ、あっ♡ がびっ♡ ん、は、あっ♡ せ、性欲値が上昇、じょ、上昇、ジョ、ジョウしょ、ぴぎゅううんっ♡ だ、だめっ♡ ママ、ママ、どんだん、せいよくが、えっちになってっ♡ ぴぎゅううんっ！ じ、人格モジュールの処理領域が不足、しし、ん、あっ♡ だ、だめ♡ これだめっ♡ せ、せっくすしたいよおっ♡ せっくす、せっくす、せっくすしたいのおおっ♡ か、カエデを、ママを、登録番号 AF-10611F 人格付与型アンドロイドを、し、使用して、せいよくしよりに、しようしてええっ♡ こ、こわれちゃうっ♡ このままだと、ママ、こわれちゃう、のおおっ♡」

ノイズ混じりの壊れかけたアンドロイドそのものの声で喘ぎながら、蕩けた表情で司を見つめるカエデ。

その姿に司の理性は一瞬で崩壊して。

「か、あ……さんっ！ カエデえええっ！ ぼくの……ぼくの、カエデっ！」

叫びを上げながら、先程と比べ物にならないほど膨れ上がった怒張がカエデめがけて打ち込まれる。

「ぴ、ぎゅ、きゅいんっ♡ 新規マスターとの性行為を開始、しま、男性器の挿入を検知……初期設定をおこない、ま……あーーーーーっ♡ ひ、みゃ、ああああーーーーっ！？？ つかさ、くううんっ♡ や、すてき、おっき、ぴゅぎいいいっ♡ きもひ、いっ……ぴゅぎっ！ 女性器ユニットキャリブレーションを開始、し、ma、ぴゅ、ぎいいいんっ♡」

司を新たなマスターとして改めて認識したカエデは待ち望んでいたものを受け入れるよう、歓喜の叫びをあげる。

回路に組み込まれた設定が変更され、未だに残っていた夫に対する設定が上書きされていく。

カエデの思い出が消去される訳では無いが、自身の設定が変更されたことを感じれば夫への罪悪感と少年への愛情がないまぜになった、人間で言えば背徳感に近い感情が人格モジュールのノイズのように生まれていく。

だが、それも爆発的に流し込まれる快楽信号の前には霧散してしまい、カエデは与えられた快楽を貪ろうと大きく体をのけ反らせる。

新たな主人のために女性器ユニットは内部の形状を変更させ、少年のペニスに吸い付くようにフィットしていく。





「……うあ、あっ！ か、かあさんっ……なか、なか、があっ！ なにこれっ！ す、すご、い、よお……アンドロイドのってこんな、こんな……っ！」

先程、オナホールもどきとして使用していたものと同じ部品とは思えぬ快感、適度に熱を持ち、柔らかくもきゅもきゅと吸い付いてくる内部。

カエデのボディと感覚共有しているのだろうか。

司の男性器にぴったりと吸い付いて、締め付けてくる内部は本物の女性器に匹敵する快感を生み出していた。

先程までの機械的な反応ではなく暖かさをもって迎え入れる内部の感覚に、司は齒を食いしばりながら腰を打ち付けていく。

本来ならば最初は優しくゆっくりと……となるはずだが、初めての少年にはそんな余裕はなくただただ快楽を貪っていく。

潤滑液の分泌量が増え始め粘り気のある水音が整備台の上から聞こえ始める。

その音と共にカエデはびくんびくんと体を跳ねさせては、激しく回路を点滅させて快楽に蕩けていく。

上半身はかくん、と力が抜けており時折快楽信号に反応してびくんっと揺れるだけ。

「び、きゅううんっ♡ か、快楽信号、が、処理にしっ pai し。しまが、ぴゅううんっ♡ ら、らめえっ♡ ま、ママ、きもひよすぎて、あたま、こわれるっ♡ つかさ、くううんっ♡ す、すき、すき、なのおおっ♡」

ぎゅいん、と音を立てて目を文字通り輝かせたカエデは凄まじい膂力で体勢を入れ替え、繋がったまま司の上にまたがっていく。

その途端、ぎゅいん、ぎゅいん、と人間では決してありえない音が響き、カエデの中で女性器ユニットが震えるような動作を始めて。

「あ、あああ……な、なに、こ、こんな……か、かあさんっ！ ダメッ……も、だめだよおおお……ママああっ！ ママ、カエデええええっ！」

絶叫と共に司の中で何かが弾けて、カエデの中に大量の精が吐き出されていく。

「ぴゅ、ああああーっ♡ 新規マスターによる射精をかくにんししししいいでsんしとう RO クをおこないままあぎいいいいいいいっー！ ??? つかさ、くううんっ♡ つかさくんので一たでうわがき、されるううっ♡ わたし、わたし、つかさくんのものに……ぴゅ、ぎ、がびいいいいーっ♡」

カエデの絶叫と共に快楽信号が最大値を振り切ってエラー表示が流れて。

人間であれば意識を失うほどの快楽の中、司の遺伝子情報が登録されてい

く。

その感覚に喪失感と幸福感、相反する感情が人格モジュールの中に生じるのを感じながら、処理負荷が限界に達したカエデの意識は急速に薄れていく。「ぴゅぎ、び……あ、つかさくん……だいすき……だよ……ぴゅ、きゅいん。電子頭脳温度が危険値、で、シャットダウンを開始、し、しま……ぴゅ、ぎ……きゅいん……がび」

蕩けそうな顔のまま、ゆっくりと倒れて司の上ののしかかっていくカエデ。

「僕も大好き……ママ……」

すでに機能が停止し、急速に体温を失っていくカエデ。

司はその体を抱きしめながら、内部機構に残った熱の余韻を感じていた。

数日後、いくつかの事務所に所属するアンドロイド達の合同ライブ。

その最中、関係者との打ち合わせが終わった司は久々に観客席にやってきていた。

大入りといってよい人混みの後ろ、最後列の目立たない位置でステージを見つめる。

壇上では一人のアイドルの曲が終わり歓声に答えながら退場していく。

入れ替わりにカエデが現れれば、割れんばかりの拍手と歓声が会場に響く。

カエデもそれに応えるように手を振れば、それだけで会場の熱は上がり、更なる歓声が響く。

ステージ衣装に身を包んだカエデの姿は、やはり家にいるときよりも輝きを増しているように思える。

『みんなー！ 今日もありありがとう！ じゃ、さっそくいくよー！』

陽気に歌い、舞い踊る母親の姿。

カエデの運動能力は現世代のアンドロイドと比べても遜色はない、むしろ勝っているようにさえ思える。

場内のテンションが高まればその熱狂へ飲み込まれそうになっていく。

一瞬、ためらった後に司は一步前へ踏み出して周りの観客に合わせて声を上げる。

サイリウムを取り出し、周りに合わせて振れば暗い会場に司の姿は溶け込んでいく。

もしこの場で彼女との関係が、数日前の出来事が公になれば生きて帰れないだろうな、と思いつつ一介のファンとして喉が枯れそうになるほど声を張り上げる。

最初の曲が終わり、両手を上げるカエデに声を上げた時。

確かに壇上のカエデはまっすぐに司の瞳を見つめていた。

自分以外には気が付かないであろう一瞬。

そして、今までで最高、といってよいほどの笑顔を浮かべたカエデはもう一度、やはり一瞬確かに司の瞳を見つめると。

『大好きだよっ！ 愛してるっ！』

カエデの上げた声に場内の興奮は最高潮に達していく。

その熱狂の中、たった一人、司は真っ赤になって俯いて。

限らない幸せに浸っていた。